



朗読劇「ベアトリーチェ・チェンチの肖像」

栗田 秀法（博物館学）

こちらを振り返るこの美しい女性を見てどんな印象をお持ちになったでしょうか。後ろ髪を引かれるようにして何かを訴えるその表情が実に切なく印象的です。この作品はバロック絵画の巨匠ガイド・レーニが1600年頃にベアトリーチェ・チェンチという女性を描いたとされるものです。こともあろうに欲望のままに生きる父親に凌辱されてしまったこの貴族の令嬢は、思い余って父親を殺害した咎で極刑を下され非業の死を遂げました。

あいちトリエンナーレ2013では、この女性を主人公とする朗読劇「ベアトリーチェ・チェンチの肖像」が上演されました。画家とモデルとの対話を軸とする大変ユニークな筋なのですが、台本を書いた演出家の田尾下哲さんはこの女性の姿に大いに想像をかきたてられたそうです。

たまたま朗読劇の会場用解説パネルの作成をお手伝いすることになり、少しばかり調べたところ、この絵のモデルと作者の名が現在のようになったのはなんと18世紀末であることがわかりました。18世紀のある画家による巫女像とされていた絵のモデルがいつの間にか処刑を待つベアトリーチェに差し代わり、それに呼応して、17世紀に活躍し優美な女性像で名を馳せた巨匠レーニの名が格好の画家として浮上したのでした。

イギリスの詩人シェリーやフランスの小説家スタンダールは、ローマにあるこの絵に触発されてベアトリーチェを題材にした作品を19世紀前半にそれぞれ発表しますが、それ以降その名はこの肖像画とともにますます広まっていきました。彼女の悲運の物語もこの絵と結びつかなければこれほど有名にならなかったのかもしれませんが。美術史的にはモデルも作者も実は怪しいこの作品が辿った数奇な運命にいささか驚きを禁じえません。



ガイド・レーニ
《ベアトリーチェ・チェンチの肖像》

授業紹介—File64

ギリシア神話を考える

専攻：西洋古典学（哲学・文明論コース）

授業名：ギリシア・ローマ神話学（西洋古典学概論）

一口にギリシア神話と言っても、実に多種多様な物語が存在します。読み物として面白い話もあれば、結局何を意図しているのかわからないような話もあります。しかし、たとえ何が言いたいかわからない話だったとしても、語り継がれてきている以上、そこには何らかの意味があるはずです。そうした神話の意味を考えてみようというのが、ギリシア・ローマ神話学という授業です。

この授業でギリシア神話を考える際に手がかりとするのは、主にアポロドーロスの『ギリシア神話』と、ブルフィン



岩波文庫
『ギリシア・ローマ神話』『ギリシア神話』

子の『ギリシア・ローマ神話』という二冊の本です。この二冊の本を読み比べてみると、同じ物語や同じ人物についての記述であっても、その語り方が異なっていることがよくわかります。両者の間には、語り手やその年代による差が如実に反映されているのです。それによって、ギリシア神話の受容の変遷の一端を垣間見ることができます。

ギリシア神話が好きで、逸話をたくさん知っていたとしても、その物語について考えてみるということとはあまりないのではないのでしょうか。この授業を通して異同のある神話を読み比べ、考察することは、より深くギリシア神話について知るための貴重な機会であると思います。また、授業の中で使用される図版や地図などの視覚的な資料も、大いに理解と興味を深めてくれます。

ギリシア神話を考えるという授業は、他の大学では受講できないような非常に特色のある授業です。知るだけでなく自分なりに考えてみることで、神話の見方も変わってくるでしょう。

[川又 葵 (学部3年)]

授業紹介—File65

『講義』を読む — 「言語学史」という授業

専攻：言語学（文学・言語学コース）

授業名：言語学史

「言語学史」という授業タイトルを聞いたときに、どんな内容を思い浮かべるだろう。歴史のなかで有名な人や本を覚える……のではなく、これは言語学の父と呼ばれるスイスの人、ソシュールの20世紀初頭にフランス語でまとめられた講義録『一般言語学講義』を読んでいく授業だ。多くの言語に翻訳されているので英語を選んで読む人が多いが、フランス語やドイツ語で読むことに挑戦する人もいる。

そして、それもただ読むだけではなく、先生からは毎度発音にキビシイ指摘が入る。「そうじゃないよ、こうやってやるの」という先生の発音を聞き、その音は舌をどう動かして発音するんだっけ、と思い出しながら直していく。なかなか思い通りにいかず何回もやり直す人もいれば、一発で見事に訂正して「そうそう！」なんて言われる人もいる。自分の知らない言語を読む授業の回には、「この綴りでそう読むの?!」という驚きや、英語と同じ語源の単語を見つける楽しみもある。

さてこの『講義』、近代の言語学に大きく影響を与えてきただけあって、サクサク訳して理解する、というわけにはいかない。「なんでこんなことを書いたんだろう」「この文章はどういう意図なんだろう」に行き詰まってしまったときは、先生が『講義』当時のことを含めて詳しく解説してくれる。ソシュールがなぜ『講義』をしたのか、なにを訴えていたのか、なぜ『講義』は重要だとされているのか。ナルホドこういうことだったのか、を毎回の授業で少しずつ積み重ねていく。そして、ふと振り返ってみると、『講義』を中心とした、言語学のこれまでの歴史が見えてくるのだ。

[福田 恭子 (学部3年)]



さまざまな言語に訳されたソシュール『一般言語学講義』

高校を訪問して

高校からの依頼を受けてときどき模擬授業に出かけます。先日も名大進学者数 No.1 で知られる県内 K 高校へ行ってきました。同じく模擬授業を行う他の大学や名大他学部の先生方も居並ぶ中、最初の挨拶の際に校長先生がわざわざこの『月刊名大文学部』を取り上げて内容を紹介して下さいました。まさか編集担当者が目の前に座しているとはご存じでなかったでしょうから、決して単なるリップサービスではなかったと思っております。改めてご愛読を感謝し、これからも名古屋大学文学部のユニークな諸研究について伝えていこうと、気持ちを新たにいたしました。(U記)

最近の文学部